

草庵仏教

第201号
(発行日)

2007年3月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月第一と
第三木曜日午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

自由をもとめて

人間は自由を求めて止まないものである。けれども、私たちが求めている自由はまず、欲しいものが買える自由である。お金は人間に〈自由〉を与えてくれる。家が欲しい、車が欲しい、いいテレビが欲しい、というように自由に欲しいものが買える自由、それを私たちは求めている。

確かにお金がたくさんあれば欲しいものが買える。だから世間での自由は裕福で金に困らぬことであると、そう思われている。

また身体の自由も求められている。身体が元気であれば行きたいところに行き、したいことも出来る。しかし病気になるったり老体になると身体が不自由になる。そうなることも働くこともできねば、どこにも行けなくなるし、したいこともできなくなる。お金があつて欲しいものが買える自由はあつても身体が不自由であれば、自由は実感されない。だから健康を願うのである。

また自由に使える時間が欲しい。どれほど健康でお金があつても、老いた両親の世話とか、病人の看護とかで大変拘束されてしまうからである。しかも自由を与えてくれると思つてるお金を儲けるために自分の自由な時間をどう費やしている。〈金の奴隷になる〉という言葉があるが、自由を得るために不自由になるというジレンマも少なくない。

以上のような自由は私たちが凡夫の求めている自由である。ただ実際の現実には、望むほどのお金もなく、身体も思うようには動かないことにもなり、また人間関係のさまざまな束縛やしごらみの中で生きなければならぬ。

しかも、欲しい物も買え、行きたいところにも行け、したいことも結構できて、満足できるかという、得てみれば案外満足できないものである。得たその時は満足でも、

やがてまた物足りなくなつて、さらに「物足りよう」とあれを求めこれを求めて、心安らから落ちつく時はない。欲しいものを手にしてみても、人間の心は容易に満足できないほど底の深いものである。

ここに一転して、外の自由を求めることは縁にまかせ、内心の満足を求め、充足を求めようとす。いわば内面重視に生きようとするのである。

しかし、自分の心を充実させ、明るくし、朗らかにしたいと思つて、いろいろ修養だの、カウンセリングだの、心のいやしだのを求めるのであるが、己の心ほど不自由なものもまたないのである。寂しさを除こうとしても除かれず、心を明るくしようとしてもいつまでも暗く、充実させようとしても、空しい感情からは解放されぬ。

こうして、自分の外に内にと自由や満足を求めるが、現実にはいろいろな不自由があり、不足や欠乏感は絶えぬ。

しかもこうしていながら一日一日、寿命は縮まってい

実際、自由を求めるのに最大の怨敵は、私は死なねばならないという圧迫である。

こういう不自由な身の有様を業繋とも宿業の身とも教えられるのであるが、自由を求めて自由を得られず、不自由な身にこそ真宗は開かれていたのである。金子大栄先生は「真宗の教えは、その現実にかき悲しみをもつことからあらわれた。われらは宿業のままに生活する他ないものである。その生活に自由はなく平等はない。されどその宿業の悲しみを機として、本願を行信するときには、不思議にも宿業のままなる自由あり、業縁のままなる平等が感ぜられる。それはただ、念仏するもののみ自証するところである」(「愚人に智慧」より)と仰せられている。

不自由な身の中でお念仏をいただくところに阿弥陀仏の大悲にあうのである。如来の大悲は、不自由な人間生活にもかかわらず〈自由である〉と感じる功德を与えてくださる。念仏の智慧は不自由な現実に随順する力だからである。

真宗問答(三十二)

第十九願について

(第十九願文)

たとい我、仏を得んに、十方衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修して、心を至し願を發して我が国に生まれんと欲わん。寿終わる時に臨んで、たとい大衆と圍繞してその人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。

現代語訳(わたしが仏になるとき、すべての人々がさとりを求める心を起こして、さまざまな功德を積み、心からわたしの国に生まれたいと願うようなら、命を終えようとすると、多くの場合はわたしが多くの聖者たちとともにその人の前に現れましょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません)

D「この願は阿弥陀仏の第十九願と申しまして、方便の願といわれています。方便といえるのは、真実へ導きいたらしめるためのお手立て、教育的手段なのです。未だ真実の浄

浄土に回向して往生せんとながうひとの臨終には、われ現じてむかえんとちかいたまえりと仰せられています。このように、いろいろ

土への往生が定まらないものを真実の浄土へ導こうとの阿弥陀仏の大悲よりもうけてくださった方便として、法蔵菩薩が誓われた願です」

K「真実信心の世界にはいることがなかなかできない、そういう衆生を見捨てず導き育てて真実信心にいらしめようと仮に建ててくださった道です」

D「そうですね。もともと十九願は、菩提心(覺りを求める心)を起こして、さまざまな行を修しても、この世でさとすることはおぼつかないと感じて、浄土への往生を願い、浄土にてさらなる修行を成就しようとするものがあれば、そういうものがいのち終わるときに、浄土の聖衆が臨終の時に迎えに来たらしめようと

の阿弥陀仏の願いです」

「親鸞聖人は十九願をどうみておられるのですか」

「聖人は、第十九の誓願に、諸善をして

聞法し、仏書を読んだり、思索したり、反省したりして、何とか信じよう、目覚めよう、救われようと励むことといえましょう」

K「そうすれば真宗の聞法をしながらもなかなか信心がいただけず、しかもなお聞法を重ねて何とか救われたいと努力を続けていく人たちもこの願の対象になっているといえますね」

D「ええそうですね。この第十九願は、一面には自分の能力を頼みにしている者は真実の浄土に至ることはできぬことを知らせて自力の計らいを捨てしめようとされ、また一面にはそういう自力の心で浄土に生まれようとする者も、なお見捨てず真実へと育てていこうとの阿弥陀仏の慈悲をあらわしています」

K「臨終に来迎しようというのは、真実の浄土への往生ではないのです」

D「ええ、臨終の来迎は仮の浄土いわゆる方便化土への往生の姿だと聖人は教えてくださっています。弥陀をたのみならず、どこまでも自らの力を頼みにして助かるうとする、そういう人の生涯も無駄にはお

わらせず、真実浄土への道をつけてやりたいという思召しで(臨終に現れて迎えよう)と願い、方便化土にてさらに導き育てていこうとの誓いで

K「どこまでも自己信頼の心がやまず、阿弥陀様が(助けを、我をたのめ)と仰せ続けておられるのに、そのお心に気がつかないのです」

D「そうですね。聖人は自力とはどういう姿かについてご消息に

自力と申すことは、行者のおのの縁にしたがいて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わがみをたのみ、わがはからいのころをもつて、身・口・意のみだれごころをつくり、めでとうしなして、浄土へ往生せんとおも

うを、自力と申すなり。と仰せられ、わが身をたのみ、わが力をたのんで、自らを(めでとうなして浄土へ往生せんと)はからうすがたを自力と申されています。自分ではそう思わなくて、阿弥陀仏をたのまないあいだは必ずといっていいほど自力をたのみにしているのです」

K「阿弥陀仏をたのむという、

＊

その場合のたのむとはどういう意味ですか」

D 「へ仏をたのむ」とは、おまかせする、身をゆだねるということであって、今日一般にいわれているような神仏をたのむというのではないわば神仏にお願いをするとという意味ではありません。そして自力をたのむという場合は、自分の能力を当てにする、信頼すること、仏になる種を自分で仕上げようとするということです」

K 「自分がなんとか頑張ってかろうというのは、自分の方で仏になる因をつくらう、積み上げようとしていることですね」

D 「ええ、私の方で仏になるにたすけとなるような条件を仕上げようとする。それは阿彌陀仏のお力を十分に認めていないということです。阿彌陀様は私が助かる因を、五劫永劫の願行によって全部仕上げ、私どもに（汝の助かる種はすべて仕上げたから、助けるぞ助かるぞ）と南無阿彌陀仏になって、この口通してお念仏となって喚んでくださっているのです。すでに助からぬ私と見込んで、助からぬ者をそっくりこのまま（助け

る、引き受ける）と喚んで下さっているのです」

K 「今のどうにもなっていない、生まれつきの、聞法する前の、ずぶの素人のまま、（そのお前をまるまる引き受ける、浄土につれていく）とまで仰せ下さる南無阿彌陀仏であるにもかかわらず、なお有難い者やよき者になって助かろうとする。（何とかならう、なれば助かる）と、どこまでも自分を見限れないのですね」

D 「ええ、自分を見限れず、自分にこだわって、いつも自分のすがたを見て、阿彌陀仏のお心に目がつかないのです」

*

K 「具体的には、自力の計らいはどういう姿でしょうか」

D 「真宗の聞法をして、分かって、理解して、納得して、それによって助かろうとはかろう。それが自力のはからいになっていくのですね」

K 「でも、真宗の聞法ですから、分かりたいというのは自然ではないですか」

D 「ええ、一応教えを聞いて頭で分かろうとする、それはそうなんです。ところがいつかは分かる、いつかは納得で

きる、というように、今の自分ではだめで仏法が分かる人間になろうとし、なり得ると思い、そこにこそ救いがあると夢見ている。これがやはり自分をたのむ計らいが止まないのですね、だから弥陀をたのまないのです。もし信心を（わかること）というなら、（何もわからぬ私をたすけたもう）弥陀の大悲が知らされることといえましょう。しかし、これは阿彌陀仏の大悲が届いてくださって分かるのです」

*

K 「最近、（阿彌陀仏に生かされていることにめざめよう）というような表現もありますか」

D 「これも、人を真宗にお誘いする言葉というかぎりではそれでいいのでしょうか。ところが、それがややもすると（阿彌陀のいのちに生かされていることに目覚めよ、目覚めなければならぬ）と聞き、なんとか聞法して（目覚めよう、自覚しよう、気がつくよう）とする。これがやはり自分はまだ自覚者になれる、ならねばならぬという自力の計らいになるのです。仏法や阿彌陀の働きに（いつか目覚めたら、

そこに救いがある）と思って、いつかは目覚められると励んでいく。ところがどうしてもこうしても目覚めることも自覚することもできない、まったくの無自覚者な私が残るところがそんな私を既に知り抜いてくださって、（どうにもならないそんなお前だから助ける仕事は我がする、引き受ける）と仰せ下さる、その阿彌陀大悲を仰ぐばかりです」

*

K 「また（真宗では機の深信が大事だから、自分の罪業の深さをよく知らねばならぬい）というようなお話をよく聞きますが」

D 「自分の罪業をよく知ることとは大事というのは、これも一応はその通りです。けれども、自分の罪をよく反省し、教えに照らして自分の罪業の深いことに目覚めなければならぬと、自分の罪の棚おろしにかかり、いつまでも自分の心ばかりを顧みて阿彌陀仏の大悲に気がつかない、そういうことになりかねません。いつか自分の罪が知れた人間になれば、そこにお助けがあるとはからうのです。しかし、反省しても、聞思しても、自分の罪業の深いことはそれほ

ど知れるわけではありませぬ、諸仏菩薩様がこの私を知りたもうほどはとてども知ることにはできません。この私の罪の深いことは阿彌陀仏が五劫の思案ですでに知り抜いてくださって、助かりようのない私を助ける南無阿彌陀仏になってくださっているのです。もう私の罪は勘定済みなのです。それを今さら私が調べるのは、阿彌陀仏の思案をもう一度私の方でしようとするようなものです。また自分は反省をすれば罪が知れる、聞法していけば罪が知れるという自分の反省能力にたいする過信があるのです」

K 「どれほど自分の罪が知れたとて、阿彌陀仏が知りたもうほどにはとても知れる私たちではありませんね」

D 「ええ、この世に生まれてきての数十年の間の罪がやっとなし分かる程度で、広劫よりこのかたの罪はとてども自分で知れるものではありませんね」

K 「自分がどうかなってお助けにあずかろうとする、これが自力の計らいで、十九願の人のすがたです」

D 「そうお聞きしています」

信心夜話

鹿児島県のHさんからの信仰上のご質問があり、それについて述べてみます。

*

一。「読んでも読んでも、勉強しても勉強しても、ただ何となく分かるのですが、私の心の中ははつきりしないのです」とのご質問。

お説教を聞いても、仏書を読んでも、考えても、「教えについて私の心はいつまでもはつきりしない」ということは別に不思議ではありません。それが凡夫の心の本性です。

いつかはつきりすると思うのが我が身知らずで、いつまでもぼんやりしているのが私の心です。ただ、阿弥陀様が「いつまでもそんな心だから、私がまるまる汝を引き受ける。助ける」と仰せ下さる、そのお助けを聞くことです。

口から出てくださるお念仏は、そういう仏の仰せ(思し召し)であります。いつまで聞いてもはつきりもせず、もやもやしどうしの私。こんな私をすでに知り抜いて、この私をそっくり受け取って「必ず浄土へ生まれさせる。助けるで心配するな」とのおしるしが、お念仏の声なのです。この南無阿弥陀仏に助けられるのです。

二。「こんな私でも称名念仏したらお浄土へ行けるのだろうか」とのご質問。

お浄土に至らせていただくのは、私がお念仏を称えるからではありません。浄土に行けるような因はまったくないとお聞かせいただいています。たとえどれほど念仏しても、私が称える念仏の功績によって浄土に生まれるものではありません。

どこまでも助かる手がかりもなにもない、凡夫そのものの私を、阿弥陀仏が「必ず、汝を浄土に生まれさせる、汝はただ称えるばかりでよい」と誓って定めてくださった、そのご恩によって参らせていただけるのです。

もし如来様が「浄土へ生まれさせぬ」と仰せられるのであれば、悲しいかな私はどんなに努力しても墮ちるより仕方ありません。しかし、万人を平等に救おうと願い、一人一人を浄土に生まれさせるために長いご修行をしてくださった如来様が、「もし汝を浄土に生まれさせることができなかつたら

私は仏にならぬ」とまで誓って、今、現に仏に成っておられます。私が助かる証拠が口に現れる南無阿弥陀仏です。「必ず助ける」と仰せ下さる、その大悲のお誓いが口に出てくださるお念仏なのです。

お念仏は私が称えて浄土に生まれる功德にするための行ではありません。阿弥陀仏が私どもをこのままにて助け

たもうお心の現れです。私の悪業煩惱にさわりなく助けたもう大慈大悲を「我が名を称えるばかりでよい、その外に何もいらぬぞ」とお示し下さるのです。

三。「本当に浄土という国があるのだろうか」とすぐ疑いの心が出てきます」とのご質問。

浄土は空間的などこかの国というのではありません。浄土はこの世を超えた浄らかでやすらかなさとり領域とお聞きしています。このような領域があるということは私が確かめたものでもなければ、賢者や思想家が知ったものでもありません。覺りを円満に開かれた仏陀(釈迦)が感得された領域です。

『仏説阿弥陀経』に「世界あり、名づけて極楽と曰う」と説かれたのは釈迦如来様です。釈迦如来様が阿弥陀仏の領域(浄土)を覚知されて、私たちにお説き下さっているのであって、私たちにそのような煩惱だらけの迷い心では浄土があるかどうかを確認することができないのは当然です。

煩惱だらけの我が心で「浄土があるのかないか」をどれほど思索し、どれほど浄土を確かめようとしても、い

つまでたつてもはつきりするものではありません。自分の心に浄土を確かめようとすると、いつまでも「本当にお浄土はあるのだろうか」という疑いに悩まされます。浄土の存在を確かめられないような、そんな能力は凡夫にはありません。

肝心なのは私の心で浄土を確かめるのではなく、浄土を確認して下さって「阿弥陀の浄土まします」と仰せ下さる仏陀釈尊の言葉を聞かせていただくことです。その仏のお言葉をまことと信じるのであります。私の考えは迷い心しかありませんから、私の考えはさしおいて、嘘をいわれぬ釈迦如来様のお言葉をまことと信じることです。

例えば、肝臓の病気になるれば、どうしますか。どういう薬をのめばいいか、それをだれが知っているのでしょうか。それはお医者さんです。薬にたいして無知な私が「どの薬を飲んだらいいか」をいくら調べても分かりません。信頼するお医者さんが「この薬で必ず治るから飲みなさい」と仰せくださる薬をすなおにハイと飲んだらいいので

《春季彼岸永代経法要》

三月二十二日(木)

午後二時始まり

念佛寺仏間にて

す。

大医王といわれる釈尊の言葉を信じ、釈尊が「浄土あり、この浄土に生まれさせたまう阿弥陀仏まします」と説かれた仏説を聞いて、「仏説まこと」と受け入れていくだけでいいのです。

また、〈釈尊は浄土をお説き下さっているが、なかなかそれが信じられない〉なら、無理に信じようとすることもありません。浄土を信じられず、疑うより仕方がない私、そんな私に南無阿弥陀仏はどう仰せられているか、そのこと一つを大事に聞くことです。そうすれば浄土があると信じられないままお助けいただけます。そこから、〈やっぱり仏様の言葉はまことだなあ〉と仏の言葉に対する信頼が生まれ、それがやがて「浄土まします」という言葉を受け入れていくことになりましょう。

(丁)